

昭和二十七年二月十五日 発行(毎月一回・十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

(通第三十五号)

慈

光

第四卷

第二號

目

人類救済の曙光……………花田正夫(1)

恩師の靈前に蹲きて……………中野憲二(9)

次

聞光抄(夏光の部)……………清水清吉(11)

人類の歴史が肇つてこのかた、阿闍世王が佛陀矜哀の大悲に浴して、忽然として眞実信に覚めた出来事ほど、崇高にして雄大な活場面は、またと見る能はぬことである。この事実こそ、一切善悪の凡夫をして、永遠の無明の大海より、無量の光明界に浮ばしめる不滅の大灯炬であり、一切罪業の凡夫をして、難度海を度せしめる不磨の大船筏である。むべなるかな、親鸞聖人が畢世の大著、教行信証において、しかも最も聖人が心血を傾注せられた信巻に、涅槃經から阿闍世王救済の顛末を長々と御引用されてゐるのも、末代かけて一切人類の帰すべき大道をこの事実において信管せられたからであらう。

一、阿闍世王の逆惡と苦惱

時は佛陀御入滅直前である。阿闍世王は二十歳餘りの青年血氣の時であつた。涅槃經の梵行品によると。

阿闍世王は生れつき乱暴者で、殺生などを常のたのしみとし、口には惡口・兩舌・妄語・綺語を犯しても氣にもとめぬ有様であつた。内には三毒の煩惱が熾んに燃え、ただ現在さ

以上が逆惡を犯し大苦悶におちた王の姿である。熾盛な煩惱の捕虜となつて、ただ現在さへよければ、あとはどうでも構はぬと言ふ姿こそ、我等凡夫の時に触れ、縁に遭つて暴露する姿である。又欲樂に耽溺して智慧の眼は冥み、上下左右の秩序もなく、唯近づく者を利用して、不利と見れば踏みこじり叩き捨てて、相手の苦痛を察することも出来ないのが、無明の暗夜に彷徨する我等の狂態である。そこに父王逆害の因が存在する。

然し幸にも王は、父の死を縁として眞実の親心に覺め始めるのである。「親は死に臨んで自分の生命の全分を子に注ぎ入れて、常に子の光背となる」と師から承つたことであるが、兩親を失つてゐる私にはうなづかされる事実であり、親の死によつて眞実の親心が段々と知らされて来るものである。阿闍世王の大苦悶もさうした所にあると思ふ。

一方、父王の投獄と餓死、自らも幽閉せられた悲劇の底に、母韋提希は佛陀の慰安に浴して佛道にすでに覺めてゐた。王の苦悶に際しては同情して無量の慈愛の手を黙々として延べてゐる。然しすでに逆害を悔い、其の罪におののく王には慈愛溢れる母を仰げば仰ぐほど、益々申訳がない、取り返しのかねことをしたと言ふ風に苦悶が増すのみであつた。遂には斯る大罪人を救つてくれる者は世の中に居ないとつた。三界孤獨である、右に走るも暗、左に行くも苦、大苦悶と大暗黒に一人立つばかりである。

二、六師の慰問

へよければよい、未來の結果など一向にかまはぬと言ふ風で惡人ばかりが近づき親んでゐた。かくて現世の五欲に貪着しきつて、上下の秩序も見えず、父母の恩も感ぜず、唯欲樂の捕虜となつて、遂には何の罪もない父王を獄に投じて横死せしめるに到つた。

然し如何に乱暴な王も、さすがに父王の横死を機として、良心の苛責に堪えず、遂に重悔の念が萌すに及んだ。すると種々の身の飾りも、舞踏や音楽も煩はしいものとなり、火の消えたやうな宮殿に王は独り煖々として苦悶を続け、果は全身に瘡を生じて、膿血が流れ、非常な惡臭を放つて、誰一人として王に近づく者もなくなつた。

そこで王は自ら念ふには「自分はすでにこの華報をうけてゐる、未來は必ず地獄におちるであらう、それもほど近いことである」と。母韋提希一人は、臭穢の膿血を洗ひ、種々の藥を塗り、高熱を冷して、看護の限りを優しく続けたが、王の病は益々増すばかりですこしも良くならない。そこで王は母に訴へて「この病苦は普通の病でありませぬ。犯した罪の報ひですから、現世に誰も能く治す人はありませぬ」と申し

斯様な大苦惱に落ちた王を六人の臣が次々と見舞うて慰安につとめる、これは当時の印度に流布してゐた六派哲學を代表するものであるが、こゝに詳説することが出来ないから、夫々の臣の見舞の言葉の上で略述する。

先づ月称大臣が見舞うて「大王よすつかり愁悴せられて、お顔もすぐれませんが一体どうしたわけでありませうか、人も常に愁苦すると愁が段々増すばかりで、丁度酒を飲めば飲むほど多量に飲めるやうになると同様であります。世の中のことは心配すればきりがありませんので、さう御心配ばかりならぬやうに」と申出るのである。

これは一角同情し慰めて居る積りであるが誠に浮調子な暴言である。誰も苦を願ふ者はないが、煩惱具足の凡夫の無常転變の世に処する者として、種々な不幸やら罪禍に落ちて夫々に苦しむには居られないのである。その人に苦しむなど言つてもそれは無理である、その苦しむには居られない苦衷を察して、共に涙して下さる無限の悲心によつてのみよく苦悩の全体がおさめ取られるのである。

更に大臣は語をついで「大王は地獄に落ちると歎いて居られますが、一体誰がそれを見て来たのでありませうか。それは世間の智慧者が、現世で惡を作らせない方便に仮りに地獄があるなどと申してゐるだけでありませぬ、死ぬと灰を撒いたと同様であります」と説いてゐる。これが空見外道の説であつて、死んだらしまひだ、生あるうちは楽しく暮せばよいと言ふ浮薄な思想である。

次に藏徳と言ふ臣が現れる。そして「お見かけするところ
大王は非常に憔悴されて、唇は乾ききつて、御声も微弱であ
りますが、一体御心の病でせうか、お身体がお悪いのでせう
か」と見舞ふのである。王は「自分に智慧がなかつたために
善悪の見分けもつかず、提婆の悪計を信じて、正しい政治を
して居られた父王を逆害し、あまつさへ佛陀と御弟子達まで
悪罵し奉つた。斯る大罪人は地獄ならでは行きようがない。
それを思ふと食も味を失ひ、夜も録々寝めない」と答へた。
阿闍世の心にはすでに自分の愚さが見えてゐる、我身に火
が燃えてゐるのである。然し藏徳は「王よ心配なさるに及び
ませぬ。法に二つあります、出家の法と王者の法でありま
す。出家の法では小虫を殺しても罪になりませんが、王者の法
では罪になりませぬ。カララ虫は生れる時母腹を喰ひ破つて
出ますが、それがカララ虫の生れかたで罪とは申せませぬ。
王位に即くには、先王を殺して始めて出来ることで、王者の
法ではそれが罪とはなりません。大王どうか心を広く持たれ
て、餘り愁苦されませぬように」と慰安する。これは自然外
道の説である。

第三に実徳と云ふ臣が見舞ふと、王は「先王は相師から、
父を害する子であると予告されて居たのに、それを超えて飽
迄も慈愛をかけて自分を哺んで下された。これは並々ならぬ
親心である、それなのに、その大恩ある父を害した自分は必
ず地獄の苦をまぬかれない」と述べる。実徳はこれを慰めて
「大王、決して心配には及びませぬ。全然罪の無い者が殺害

い如く、自分は唯現在の欲望満足に耽つて、未来の悪果を知
らないで、逆悪を犯した。何たる愚者であらうか」と語る。
すると大臣は「大王、誰にたぶらかされて地獄に落ちると信
じられたのですか。これは世間に利発な者が居て言ひふらし
ただけであります。麦を蒔けば麦が生へ、稻を蒔けば米が出
来るやうに、人を殺せば遺つて人となつて生れるのでありま
す。全体殺生などと申しますが、若し人に魂がないとすれば
木を切り石を割るのと同様で人を殺すとは申せませぬ。若し
靈魂がありといたしますれば肉体を切ることは出来ても魂を
切ることは出来ません。だから地上に殺人などと云ふことは
あり得ません」と色々理屈を並べ詭弁を弄するのであるが、
大苦惱の底にある王には理屈は何の役にも立たない。

第六に無所畏と申す臣が現れ「大王、智者は苦しみ愁ひま
せん。大いに苦悶するのは愚者の業であります。先王は成る
程有徳な方ではありましたが、心が偏狭で佛道ばかりを尊ば
れて婆羅門教を軽んぜられました。大王はこの不平等心の先
王を殺害せられて、平等に婆羅門を供養するために王位に即
かれたのでありますから、大王は善事をせられたのでありま
す。世間に善だ悪だと申しますが、諸の河川を大海はこぼみ
ませぬ。解脱を得る上には悉く差別はありません」と慰め
る。

以上六人の者が次々に現れて夫々に慰めるが、王の心は一
向に晴れない、懊惱は愈々増すばかりであつた。これは六派

せられると云ふことは有り得ませぬ。先王は実に徳の高い方
でありましたけれど、全然罪が無いとは申せませぬ。今生に
なくても前生に如何なる罪を犯されたか解りませぬ。その先
王に罪があればこそ殺害の報ひを受けられたので、これは大
王の罪ではありません。斯ることは何人も防ぐことも止める
ことも出来ぬことであります」と言上してゐる。
これは相手に罪の原因を求めて、責任を逃れようとする心
である。これは我等凡夫の事ある毎に思ひ、繰り返してやま
ぬ惑である。

第四に悉知義と云ふ臣が現れて慰安する。即ち「大王、愁
をお捨て下さい。昔ラマ王は父を害して王位に即き、その他
バツタイ大王、ビルシン王等も同様でありますが誰も地獄に
落ちた者もありません。現在もビルリ王、ウダヤ王等も皆父
を害して王位に即いて居りますが、一人として愁苦して居る
者はありません。大王、この世には人道と畜生道はあります
が、地獄道、餓鬼道はありません。御心配は無用でありま
す」と述べる。

これも我々が罪禍を犯す時、自分ばかりでない、誰々も、
誰々も同じであるが、皆涼しい顔、素知らぬ顔をして平氣で
ゐる、別に自分ばかり苦しむ必要はないと云ふ無責任な自己
弁護である。

第五に吉徳大臣が訪れる。王は「愚者が味覚のみに執へら
れて食中の利刀に氣付かぬ如く、鼠の食を貪つて猫狸を見な
哲学を、代表する者の声であるが、願れば我々が罪禍を犯し
た時、その苦に迫められて色々と思ひ惑ふ心の代表的なもの
である。

三、善友者婆大臣の慰安

時に佛の弟子、王の親戚、国の大臣、大医である者婆が、
王の枕頭を見舞ひ「大王、安眠は出来ますか」と尋ねる。王
は「大逆の身がどうして安眠など出来ようか。魚が水に離
れ、鹿がわなにかかつた如く、何等の樂もない。唯日夜に地
獄の近きを怖れ苦むで居るばかりだ」と答へる。

大臣はこの王の姿と言葉に接し「善い哉、善い哉、大王大
逆を作すと雖も慙愧の心あり」と讃へてゐる。この讃歎の声
は塵埃の中に黄金を見出した如き歎声である。我々は他人の
悪をよく見へるが、自分のことにかけては盲である。だから
常に他を責め、環境をのろひ、すこしも自分自身の愚悪に氣
付かぬ。然るに王は提婆を責めず父を罵らず、唯自己の愚昧
さを悲歎してゐる。斯る心境に到つたのが、すでに篤信の父
の自然の感化であり、すでに佛力によつて廓然大悟してゐる
母章提希をとほして注ぎ込まれた佛智のひらめきである。佛
弟子者婆は、世に稀な佛智のひらめきを王の上に見出した、
そこに思はず知らず「善い哉、善い哉、」と口から迸つたの
である。王は未だ無自覚で居るが、者婆には驚異の外はなか
つた。

大臣は更に語をついで「大王よ、私は諸佛世尊から次のや

うなことを承つて居ります、『二つの自法あつて能く衆生を救ふ。一つには慙、二つには愧。慙とは自ら罪を作らず、愧とは他を教へて作らしめず。慙とは内に自ら恥ぢ、愧とは外に人に向ふ。慙とは人に恥ぢ、愧とは天に羞づ、是を慙愧と名く。慙愧なき者は人と爲さず、名けて畜生と爲す。慙愧あるが故に則ち能く父母・師長を恭敬し、慙愧あるが故に父母・兄弟姉妹あり』と

この佛語は私の胸をギクリとえぐるものがある。慙愧無き者は畜生同様で、親兄弟師長は存在せぬ、との厳しい誠めである即ち自分はよいと思つてゐる間は上中右左の秩序は見えず、自分は師に対しては相應の礼を失はず、親兄弟にも親愛の心で接してゐると好い氣持で居るのであるが、それは恰も自己催眠の迷信の狐つきの話に、「自分は立派な風呂に入つて氣持よくひたつて身体を洗つてゐたが、フト覚めたら肥壺の中で平氣でゐた」と云ふことを聞いてゐるが、それと同様である、自分が描いた煩惱の湯船につかつて良い氣持になつてゐるので狐つきの迷信と何の変るところはない、そのまんまが肥壺の湯浴である。私は親に對し師に對し兄弟に對して、常に斯うした迷信におちて、眞の親兄弟や師長を見失ふのである。茲に煩惱の肥壺に湯浴して好い氣持を續けてやまぬ私の故に、孝養父母も奉仕師長をも往生の因より選り捨て給うて、唯「念佛」二つを佛御自ら選り取られた深意を仰ぐのである。

更に大臣の言葉は續く「私は又佛から次のことを承つてゐる。

我々はこの大臣の言葉によつて大きな指示を受ける。即ち人生問題の根本的解決の道は信仰問題にあるといふ一事である。我々は人生に処して色々の難関に遭遇して其の荆棘の道の色々と腐心して連るのであるが、その根本的解決が大信心において開ける、現に佛道において無碍の一道を歩まれてゐる人々があるのに、未だにそれが得られるといふことを知らないでゐることは誠に残念なことである。大臣の勧めによつてそのことが明らかにされるのである。若しこれを知らないならば、重病に苦しみ乍ら訪ふべき医師を知らぬと同様な悲惨事である。苦悩の人生に於て根本的解決の得られる道を知る、よしんばそれを未だに得られないにしても、そのことは大きな慶びの一つである。道ありと信する事はやがてその道のひらける第一歩である。大臣は王の爲にここを力説したのである。

更に大臣は、佛心は平等にして老少善惡の差別の相に偏し給はずして、現に六道の世界を縦横無尽に救済し、拔苦與樂せしめ、佛道に導き給うた実例を詳細に述べる。

「先づバラモン教に入り、師の邪心に禍されて千人を殺さうとした悪鬼人オウクツマを佛はみそなはして、自らその前に身を現じ給うて遂に狂亂の心をおさめ、佛道に歸せしめ給ひました。

次に、シユピラ王子は、其の父の墮りにふれ、手足を截られて深い井戸に投ぜられましたが、其の母がこれを救ひ出して、佛所に詣で佛を拜し奉ると手足が自然に元通りに還つて具はり、これを救ひ遂げられました。

ます。「智者に二あり。一には諸惡を作らず、二には作り已りて懺悔す。愚者に亦二あり。一には惡を作り、二にはその惡を覆藏す。懺悔ある者は、明月の一度黒雲に覆はるるも、黒雲去りなば旧に倍する光あるが如し。若し罪を覆藏する者は其の罪増長するのみ」と。然るに善い哉大王、能く因果を信じ、業報を信じて居られる。罪を覆ひかくして慙愧の心もなく、因果、業報も信ぜず、善友諸佛に親近しない者を闡提と名づけられて居ります。この者は諸佛も如何ともすることが出来ませぬが、大王はすでに闡提ではありませぬ、佛によつて必ず救はれ得る方でありませぬ」と懇に言上してゐる。

次に大臣は佛徳の廣大無辺なことを讃歎して、王の所謂「能く治する者無し」と、重罪に心閉ぢて孤独無援の暗く淋しい心を温めるのである。即ち「大王のよく知られる如く、カピラ城のシツタルタ太子は、入山學道、遂に六年、師なくして自然に無上道を覺られて佛となられました。あらゆる功徳を具足せられて、御智慧は限りなくまします。一切衆生の苦相を知り尽されて、大慈大悲の心やむことなく、一切衆生を一子の如く憐憫せられ、仔牛が親牛に隨逐する如くに我等に付き添うて下さつてゐられます。其の智慧は雪山の如く高大であり、其の慈悲は大海の如く深遠であります。佛は金剛智を得られて、衆生は一切の罪惡を碎破する不可思議の御徳を円満に具へて居られます。若し大王が佛のみもとにおいて道を聞かれるならば、必ず重罪は消滅いたします」と。

次に、恆河のほとりに五百の餓鬼が棲んでゐました。餓鬼が水を求めて頭を下けますと、河全体が焰となり、熱いので頭を上げると焰は消えて水となりました。飢え渴いた餓鬼は、あまりの涸渴の苦しきから何年も何年も同じことを繰り返して、常に満たされぬことを歎き悶えて居りました。佛は夫等の前に現れ給うて「水だ、心配なく飲め」と仰られますと、餓鬼共は喜んで頭を下けましたが、再び水を飲み得ずに頭を上げました。佛は「矢張り焰と転じたのか」とお聞きになると、「いやさうではありませぬ、然し長年続けた習慣で頭が上りました」と述べ、今度は満喫し、やがて佛道を求めるに及び天身となり得ました。

次に、ハラナ城にアイツタと申す長者の子が居りました。其の母に通じて父を殺し、母が又他の男と通じたので母も害しました。ところがその秘密を師匠が知つて居りましたので恥づかしさの餘り師匠をも殺しました。その後身の置き所がなく、祇園精舎に走つて出家を願ひましたが、諸の比丘達は彼に三逆罪があるので許しませんでした。すると腹を立てて僧坊に火をつけ多くの人々を殺害しました。然し後に王舎城で佛にお遭ひ申して、出家を許され漸次に重罪を滅して佛道に入りました。

更に酒に酔はしめて狂亂したナギラ象を放つて、提婆が佛を害し奉らうといたしました時、佛の御前に狂象が参りますと、醉がさめて了ひ温順な象となり、佛は象の頭を優しく撫で給ひました。佛の慈悲は斯く畜生にまで及ぶのであります。

す。唯佛を見るといふことだけで斯うした徳を頂くのであります。又狂象を放つて提婆達多をも憐れまれて、法を説き其の罪を軽からしめられました。

大王、実例は數へ上げることも出来ない程であります。どうか私の語を信じて下さいまして、速に佛の所にお出で下さい。若し信ずることがお出来にならないならばせめて思ひ出して下さい。佛の御心は怨親平等でありまして微塵も憎愛の心はありません。出家の弟子に法を説かれるばかりでなく、在家の人々にも説いて下さいます。又富豪のバツタイカ王と變らず下賤のウバリも救はれて居ります。利根の舍利弗ばかりでなく鈍根の周利槃得をも覚らされました。無貪の大迦葉と共に愛欲の熾んな難陀をも救うて居られます。禪定を靜かに得たりハダと共に、子を失うて悲歎彷徨してゐた婆羅門の女ハシツタの爲に法を説かれました。貞淑なマリ夫人の爲のみでなく姪女蓮華女にも救ひを垂れ給うて居り、外道のニケシンの爲にも法を演べられました。又若い者の爲のみならず老衰の八十の翁のためにも懇に法を説いて下さいました。

佛心は実に廣大にして無辺である。耆婆大臣の言葉を通じて、三界六道、天地人生の一切が平等の佛心におさめとられてゐるのを知らされる。聖人が唯信鈔文意に「彼の佛の因中に弘誓を立つ、名を聞きて我を念すれば総て迎來せん。貧窮とはた富貴を簡ばす、下智と高才とを簡ばす、多聞と持淨戒を簡ばす、破戒と罪根深とを簡ばす、但廻心して多く佛を念すれば、能く瓦礫をして變じて金とせしむ」の聖句を詳らかに

御解き下されてある御眞意が深くここに頂ける。更には大臣は、王をして佛に向ふ心を切に促して次の様に言上する。

「大王、臣は又佛から斯様のことを承つて居ります。『たとひ一月の間衣食を一切衆生に供養し恭敬するも、一念に佛を念する功德に如かず、金銀財宝を百乘の象車に積みて供養するも、発心して佛に向ひ奉足一步するに如かじ、恆河砂の衆生を供養し布施するも、一度佛のみもとに到りて誠心に法を聞くに如かず』と」

理をつくし情をこめた善友耆婆の勧めは、苦悶の王の心に切々として迫り、深く動かした、そして佛徳の廣大なこと崇高なことは王の身に沁みただであるが、佛前に到らうとして先づ第一に起つた障りは次の王の言葉で表白される。

「佛は清淨にまします。寂靜を得られてゐる。煩惱を永く滅劫して居られる。御弟子達も皆さうした方々ばかりである。然し自分は大罪人であつて、惡業にしばられきつてゐる。然も身体は臭穢極りのない身で、地獄より外に行き場所のない者である。斯る極惡人が佛所に詣りても、必ず佛はお会ひ下さることも、御言葉をかけて下さることもあり得ないことである。大臣は種々に勧めてくれたが、自分の様な醜惡な者が、どうしてか清淨な佛前に出ることが出来やうか。さう云ふことは思ひもよらぬことである。」

に愈々逆惡無道の自己が知らされて、王は自分で自分を支へきれなくなつてばつたりと倒れ、悶絶するのである。

以下 次号

近 詠 雜 記 冬 扇 子

力なく病める身ながら水に火に、焼けざる白き道を踏みゆく

瑠璃のごと澄める心の底に湧く眞珠の涙、合掌にて受くモロナ

よし人は迂愚を嗤うもわが道は世の眞底の安けきに生く

憂きいのち愛しと覚えし安けさよ大悲のみ名をたゞ呼びに呼ぶ

井戸車繰りては生くる世の底に湧きてうれしき法の眞清水

珍らしきこともあらず暮れゆる今日のひと日の有難きかも

縁ありてこの世に生れこの佛の聖き涙に濡れし尊さ

天上の榮華の夢もあらばあれわれ地の果てに淨土忻い往く

谷間なる苔蒸す巖透りつつ法の眞清水澄み傳うかも

病める身にほのかに知りぬ彌陀佛は病みては病みて限りあらずも

かくばかり忍ぶ草にも明けの春耐へては萌ゆる道の醜草

思師の靈前に蹲きて

中野憲 一一

謹みて、本師求道院釈常觀先生の御靈前に白す。本師常觀先生かくれましまして、正に拾年の星霜を経ました。先生は七十二年の御生涯を通じ、朝な夕な、如来の大慈悲を身を以て教へ賜はりました。その威嚴極まりなく、その溫容溢れ給ふ御姿に御声に、今猶眼前に髣髴として嘗て在ませしが如く拜されるのであります。

顧みますれば、昭和十六年十二月三日、先生は七十二年の莊嚴なる生涯を閉ぢ、釈尊が涅槃に入らせられた様に、身を似て、佛陀御一代の教法を顕示し、涅槃の妙境界に還り給ひました。先生の御生涯は「如来は一切の爲に常に慈父母と作りたまへり。当に知るべし、諸の衆生は皆是れ如来の子なり。世尊、大慈悲をもて衆の爲めに苦行を修したまふこと、人の鬼魅は著はされて狂亂の所爲多きが如し」の涅槃經の阿闍世王の佛徳渴仰の偈文のその儘でありました。

先生の御教に依りますと、一切經の中で一番有り難いのが大無量壽經であり、大無量壽經の要義を明瞭に書き著はして下されたのが教行信証であり、教行信証の骨目を端的に御示し下されたのが數異抄一篇であるとの仰であります。が、本師常觀先生ましますば、如何にして數異抄一篇が私共に頂か

せて頂けた事でありませうか。

如来世に興出し給ふ所似は
唯彌陀の本願海を説かんとなり

五濁惡時の群生海

応に如来如実の言を信すべし

と正信偈に述べられてありますが、私にとりましては常觀先生の御出世により、始めて彌陀の本願の眞意に遭ひまひらすことが出来たのであります。恩師の恩徳誠に無窮であります。私は何たる宿縁の甚幸でありませうか、越後の飯陳たる一漁村に生を享け、大正八年九月、十七歳の秋、第二高等学校に入学しまして程なく、阿刀田令造先生の引導に依り翌十月、仙台求道会に於て、始めて常觀先生の御講話を拜聴いたしました。其時先生は四十九歳で在らせられました。是れが機縁と成りまして、常觀本師、常普今師より慈誨を蒙る事、爾來春風秋雨參拾星霜であります。私如き下根の凡夫が、どうして佛法等と云ふ尊き教に近づき、更に祖師聖人以來七百年にして初めて世に現はれ給ひし常觀本師の教を蒙る事が出来たのでありませうか、誠に不可思議の到りであります。唯に教に接した丈ではありません、実に私の生活の全体

について、実に懇切到らざる無き嚴訓慈誨を蒙る事は、ひたすら感泣の外はありません。更に、故・きそ子令夫人よりも限り無き御慈愛を頂きました。私の生涯は全く、常觀本師と妙會禪尼の御化導に依りまして決定致しました。

○諸佛方便ときいたり

源空じりとしめしつづ

無上の信心おしへてぞ

涅槃のかどをばひらきける

○眞の知識にあふことは

かたきがなかになほかたし

流転輪廻のきはなきは

疑情のさばりにしくぞなき

恭くも、祖師聖人は源空上人の御鴻恩を常に斯く讃歎し給ひましたが、私は、常觀本師と妙會禪尼の御鴻恩を感謝申し上げる辞を知りません。それ所ではなく、私、憲二は多生曠劫この世まで、あはれみかむる身でありながら、実に忘恩の徒であります、反逆の児であります邪見憍慢の惡業生であります。

御靈前に跪き奉り、涙あたらなるものがあります。先生、申し訳も御座いませぬ。四十九年私の生涯、唯造惡の一生であります。極重惡人、唯佛を称すべし。我亦彼の攝取の中に在り。煩惱に眼を障へて見たてまつらすと雖も、大悲愍きことなくして常に我を照し給ふ」の聖語は只今の私に沁み透る大悲であります。先生は此の世において慈しみ憐れみ給

ひし如く、今は彼の土において佛果を証されて、永却の如来として、常に私を照鑒攝護下されますこと、誠に感謝に堪えません。

先生かくれましまして正に拾年、次いで令夫人様も逝去遊れまして、実に悲泣雨涙に堪えませんが、先生并に令夫人様の御跡は、常普今師并に伊恵子令夫人が、先生御在世の儘に私共を御化導下されて居ります事は、唯々不思議と申上ける外ありません。末法濁世の今の世に求道会館と求道学舎が嚴然と存在し、聖徳太子以來伝灯相承し來れる篤敬三宝の大精神を天下に唱導されてゐる事は現代の奇蹟であると共に、我國民の唯一の灯炬であります。

我が國民は、先生御一代の御教、篤敬三宝と絶対秩序の大精神に背き、且つ蹂躪し、自ら尊き二千餘年の國史と国土を破壊しました。先生の御令息文常様も悲しきその犠牲となられて盧山の露となられました。文天祥の所謂山河破碎して風絮を漂はし、身世の飄搖雨萍を打つ」これが我が国の現状であります。「燕子愁は迷ふ江右の月、杜鵑声は破る洛陽の烟」たる我が山川を見るにつけ、先生は淨利より如何に是を照覽し、如何に悲涙し給ふ事でありませうか。我が祖国日本の復興の道は、唯々、如来聖人の威神力と常普今師の御化導に待つや大なるものがあります。宗の趙鼎銘は「身は箕尾に騎して天上に帰らんも、氣は山河と作りて本朝を壯にせん」と遺訓を垂れて居りますが、先生は今こそ我国土人民を慈しみ給ひて、還相の利益を廻向し、狂亂所爲多きが如くましま

す事を確信致して居ります。国土荒廢、世間虚做を見るにつ
け、唯佛是真、念佛成佛是真宗の大德音を渴仰し奉つて居り
ます。

七十餘年揚徳風

本源祖述眞宗

信邦建現國威峻

四海和平萬國豊

先生の第十一週忌に当りまして、悲喜の涙止め難く、謹み
て温容を仰ぎ御礼申し上げます。

昭和二十六年十二月三日

遺弟 顯 爾

墨 汁 一 滴 子 規 居 士

◎ 毎朝繻帯の取換をするに多少痛みを感じるのが厭でならんから
必ず新聞か雑誌か何か読んで痛さをまぎらかしてゐる。痛みが烈し
い時は新聞を睨んで居るけれど何を読んで居るのか少しもわからな

聞 光 抄

「順境の喜びは、逆境の悲観となる。日輪はどこへ行つて
も光明の中である。何となれば、日輪自身がひかるから……」
と眞田先生が言はれた。今日この頃の日輪の光の強さに打た

自分自身を省みない。全くお恥づかしいことだ。私の道は唯
一つ、いよいよみ教を聞かして頂くだけだ。

今幸にしてお念佛の一道に逢はさして頂き、悲しい時は慰
められ、浮つ調子の時は叩かれ、不平を云うてはおのれを省
みさせられ、その時々々に調節して頂く、何とした有難いこと
だらう。

この偉大なるお念佛こそ、なみなならぬ法藏菩薩の願行
によつて成就せられたることを想ふとき、唯々、不可称、不
可説、不可思議の功德を仰がずにはをられぬ。

私の姿に氣付かずに日暮しすることが、この世をいかに不
安な、そして焦慮の世界にすることだらう。これを思ふとき
に、どうして教のみ光を仰がずをられよう、唯の一日だつ
て――。

私にとつての奇蹟は、大地が割れたとか、逆竹が生へたと
か、そんなことではない。どうソロバンをおいても、どうし
ても割り切れぬ私をして、今日かくあらしめられるそのこと
が、何ものにも代へられぬ大きな奇蹟だ。

私自身を照し出され、醜い自分の姿にあきれた時に「何と
した自分は仕合せ者だらう。このやうな私を、皆様が――い
や、宇宙全体が温く包んでくれてゐるんだ」と思ふと、この
世がひかり輝いて、ほこらしげに仰がざるを得ない。

しかし、自分自身を忘れて居た時、人を呪ひ、世を呪ひ、
不平不満の声に疲れて、心のやすまる時がない。

いというような事もあるが、又新聞の方が面白い時はいつの間にか
時間が経過して居る事もある。

それで思い出したが昔関羽が片手に手術を受けながら本を読んで
ゐる絵である。手術も痛いであろうに平氣で本を読んで居るのを見
ると関羽は馬鹿に強い人だと小供心にひどく感心して居つたが、ナ
アニ今考えて見ると、関羽も矢張読書でもつて痛さをごまかして居
たのに相違ない。

◎ 一本の扇子を以て自在に人を笑わしむるを業とせる落語家の樂屋
は存外嚴格にして窮屈なりと聞きぬ。我俳句仲間に於いて俳句に滑
稽趣味を發揮して成功したる者は漱石なり、漱石最もまじめの性質
にして学校にありて生徒を率ゐるにも嚴格にして不規律に流るるを
許さず。紫影の文章俳句常に滑稽趣味を離れず、此人亦甚だまじめ
の方に大口をあけて笑う事すら余り見うけたる事なし。古の蜀山
人は果して如何なる人なりしか知らず。俳句界第一の滑稽家として
世に知られたる一茶は必ずまじめくさりたる人にてありしなるべ
し。

清 水 清 吉

れるとき、ひよいとこの言葉を思い出す。

全くそれに違ひない。自分自身の中に強くひかる原動力を
頂くことは抜きにして、唯々環境のみをかれこれと責めて、

私は私の上に満たされりものを悲しんで泣く。私の満たさ
れぬものが満たされてゐるを見れば、とても泣いてゐる人と
は見えない。泣くのは、私の満たされぬことに限るやうに思
うてゐる。だからなかなか他人様の愚痴を聞き得るだけの餘
裕を持ち得ない。そしてみづから狭い世界を作つてゐる。

他人様の愚痴は退けながらも、自分の愚痴だけは聞いて貰
ひたい、何とした矛盾したことであらうか。

今如来慈光の賜により、明かに人の姿を見さして頂き、貪
欲、瞋恚、愚痴の三毒の煩惱を基礎としての生活であるが故
に、満たされてゐると云ふ人のあり得べからざることを知ら
しめて頂く時に、生きてゐると云ふこと自体が苦みんでゐる
ことであり、泣いてゐることであることに氣付かせて頂く。
それによつて始めて自分に大きな問題を控へて居ながらも、
他人様の愚痴をもすなほに聞き得る広い世界が生れる。

生活苦におはれて、氣息奄々として疲れ果ててゐる者にと
つて、安らふべき蔭はいづこにありや。わが心の頬を撫する涼
風は、果していづこより来る。求むるはこの蔭、この涼風――。

清風宝樹をふくときは

いつつの音声いだしつ

宮商和して自然なり

清淨勳を祀すべし

ひとたび、この御和讃を誦するとき、唯如来清淨の願心よりうち建てられし淨土を欣求し、かすかながらも現実の世において、その蔭に憩ひ、涼風に触れさせて頂くことが出来る。何といふ有難いことだ。

無常とは、よいことが悪く変ることばかりではない。悪いことがよく変ることもまた無常なのだ。この世の中において、何ものが変らずに居るものがあらうか。一日だつて、一秒だつて――。だが、さう見せられて居ながらも、なかなかそこにしつかりと腰がおちつかぬ。

いつの間にやら、変らぬものと握つてゐて、蹴つまづいたとき始めで目がさめる。そして狼狽する。よく変ることは、自分の努力の現れとうぬほれて、悪く変る時だけうろたへさはぐ。全くあさましい限りだ。

私は何とかしてこの苦しみから脱却したいと焦つて何ともならぬ。唯々この苦しいまんまを抱いて下さる方に抱かれるより外はない。それは、考へて知る世界ではなく、触れて判る世界だ。血の滲む体験の世界だ。仮定ではなく実在の世界だ。

自分が拾圓の金を有する時、壹圓の金を有する人をさげす

愚かな者であるから、大丈夫救はれるんだと思ひ、罪惡深重だから確かに救はれるんだと思ふ。そして軽い氣持で救はれたやうに思ひ、何かしら問題が起つて自分の愚さにあいそが尽き、ほんとうに罪惡深重に泣くときには、却つて救ひがあまりやしくなる。

未灯鈔に曰く「法文沙汰してさがしがしき人の参りたるをば、往生いかあらずらんと確に承りき。」

さがしがしき人とあれば、學問のある、智慧のある人のことなので、おのれのことではない。おれは、學問もない智慧もないんだからと、遠いそんなことを考へて、俺は大丈夫だと思ふ。いや、さうではなかつた。さがしがしき人とは、愚かであればあるで、それなりに色々といねくり廻して、概念の世界を作つて居る私のことであつたと味はされた時に、これは全く油断のならぬことだと思つた。

人と人との交りは、大抵利害關係を基としてゐる。だから刎頸の交りなどといつても、利害關係の相反するときは、他愛もなく離れ去つてしまふ。

全く人と人との交りぐらひはかないものはない。これを変らないもの、何時々々までも続くものと見るところから悩みが生れる。まことに情ないことだ。

魂の通ふお交りによつて、始めて尽きない破れないお交りが出来るのだ。何となれば、よし利害關係が生じて、いやな

む。最大限、九圓九拾九錢を有する人に対して然り。われより小額を有する人をさげすむは、これ我よりいくばくなりとも多くを有する人をおそるの我なり。

智慧また然り、學問、地位また然り、この煩ひにわれ苦しむ。

されど如来の慈光の下に、変転極りなき現実を肯定するとき、廓然として心中に安らかさを得る。

自動車の騒音から、水のせせらぎを聞く河辺にと居を移して、同じ市内にもまたこの別天地あるに驚く。夜半に夢さめて、かすかな水の流の音に雨かと疑ふ。

同じ人の世にありながらも、しかも同じ町に住みながらも、僅に居を隔ててさへもいまだ知られざるこの世界を味ふ。ましてや心の世界においておや。自我主張の世界を作りつつ、その自我主張なるを知らずして、広き世界をみづから狭めて、人を憎み世を呪ふ。

今如来慈光のはぐくみを受け、念佛のもとに広き世界を見せしめられて、余りにもかけ隔りたる心の世界に、ただ驚くのみ。偉なるかな、本願の世界、壯なるかな、念佛の世界。居委らず、人委らず、心の如何によりて世界の広狭を作り出す。

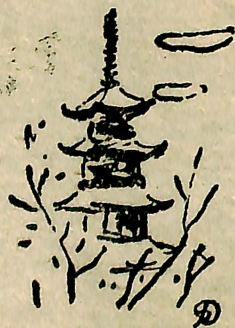
愚かなる者、罪惡深重なものを救ふと聞けば、すぐ自分は

心が起きても、なほ心の底に通ひ合ふものがあるから。

病氣の御見舞、その他のお見舞でも、心が根本問題なのに、ややもすれば人づてなりとも品物さへ送れば、それでお見舞と心得てゐる。だからお互様、物の多少の比較が問題になる。従つて、物のなくなつた時は、お見舞が出来ぬことになる。ほんとうに窮屈な世界だ。

腹一ぱいに大氣を吸ふ何といふ愉快な言葉であらう。これは私の心の底から願ふ世界だ。

信仰生活とは、宇宙にみなぎる無限の恩寵を、ただ腹一杯に吸ふ世界ではなからうか。無用の遠慮をして、いつも空腹になつてゐるのは、小賢しい自我主張の世界ではあるまいか。



編集後記

寒中御見舞申上げます。一月と二月は草庵にこもつて居りますが、梅花ようやくふくらみ極寒に堪えて咲き出でんとして居る姿に、尊いひかりを感じられます。年々のこと乍ら独立日本の新春、ことに心を打つものがあります。

年頭の一道会館の講話始めは福島先生の御縁を頂き、大無量壽經の講話をして頂きました。いづれ近く誌上にて皆様におとどけ致します。其の節承りますと、近角常観先生著の「人生と信仰」と「懺悔録」とが京都の丁子屋書店から再版されます由、先生御往生後十年、茲に御著書がいよいよ動き始めて下さることは意味深く感じられます。波濤荒き海を日本丸の出発せんとするに際し、悲心切々として斯く建理し玉ふやに拜することあります。幸に佛縁を遠く深く蒙る我等「佛法弘まれかし、世の中安隱なれかし」の聖意を愈々感佩申すことであります。

▼「恩師の靈前に蹲きて」の中野憲三氏の原稿は昨年十二月三日、満十年の近角先生の忌日に、求道会館での会合で、謹んで朗読された原文であります。声涙共に下り方感胸に迫る懺謝の声、尊き極みであります。御住所は東京都、田園調布三丁目九六ノ一であります

▼「聞光録」は清水凡禿居士の「夏光の部」を頂きました。随縁随所に佛智のひらめきと佛慈のかがやきを感じ、再読する私の心中に異様の驚きと深き信味を教へられることでもあります。次回に秋、次に冬の部を掲げさせて頂き、善友の声に浴したいと存じます。

▼「人類救済の德音」は涅槃經の梵行品を拜読し、大王阿闍世の佛陀金口の法雨に浴し大信界に転入する姿に我身を見出し、感銘おくあたわぬものがあります。成べく詳細に御照会申し度い心で居ります。「万行円備の嘉号は、疑を除き証を得しむる真理なり」と聖人が本典総序に述べられてみますが、全く伊智の不慮辭力に疑心が除かれて移るのであります。人智の限りとしての六派哲学に塵安を得ず、絶望困苦の底に立つて、もう徹底の動きのとれぬ阿闍世王の上に、三界六道、自由自在に無碍の御徳を持たれる佛心におさめとられる姿、何たる崇高にして雄大な大場面でありしやうか。このことこそ人類の黎明を告げる曙の鐘であります。阿闍世王の心事に、共感共鳴、一体化するところ、佛陀の生ける御眞実が昭々乎として身に徹し心に到るのであります。我等悪に縛られ、愚に盲ひ、苦に迫られて、無窮流転をさだめとする者、この悪人救済の德音を仰ぎ、大信海転入の不

思議に帰しまらせませう。

花田記

昭和二十七年二月十日 印刷
昭和二十七年二月十五日 発行
毎月一回十五日発行

定価 一年金拾七円(郵税共)
半年金百四円(郵税共)
半年金二百円(郵税共)

名古屋南区駄上町二ノ二八

編集人 花田正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田政雄

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千草印刷所

名古屋市南区駄上町二ノ二八

一道会館

発行所 慈光社

振替口座番号 名古屋一〇四七〇番

慈光第四卷第二号 昭和二十七年二月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可